

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1770700126		
法人名	特定非営利活動法人菜の花		
事業所名	グループホーム菜の花・羽昨		
所在地	羽昨市大川町1丁目34-1		
自己評価作成日	令和3年 2月 1日	評価結果市町村受理日	令和3年4月6日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社寺井潔ソーシャルワーカー事務所
所在地	石川県金沢市有松2丁目4番32号
訪問調査日	令和3年3月16日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

① 全職員は「1週間の予定」「1ヶ月の予定」をしっかりと把握し、「重点的なケアを必要とする人の把握」「病状が不安定な人の気配りすべきケアの把握」等は良く理解し実行しているが、代表者は職員に全てを任せることへの不安感が大きく、代表者が朝のミーティングを仕切っている。
 ② 前年度に努力して身に付けた「職員の情報共有の強化」「職員間の伝達を密にする」は、十分に出来ている。管理者が年度途中で交代したこともあり、今暫く、上記2点について、しっかりと徹底を図りたい。尚、管理者交代により職員間の気まずい雰囲気はなくなり、職員全員が前向きにひたすら努力している。
 (平均年齢 85.2歳 / 平均要介護度 2.1)

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

いつもなら、日用品の買い出しに近くのお店やスーパーに利用者と一緒に出かけたり、月に一、二度は喫茶店でカラオケを楽しんだりしているが今年はコロナのために行っていない。そんな中でも、グループホーム便りができたときには町会等に配布したり、川沿いを散歩したり、気多大社や羽昨市内へドライブに出かけている。その日の献立は、テレビやチラシ等参考にして、利用者から食べたいもののリクエストを聞いて決める。買い出しは現在職員が行っているが、外出自粛要請前は利用者と一緒にスーパーに出かけていた。野菜の皮むき、ゴマすり、食後の茶碗洗い等、その日その時の利用者の調子や状態に合わせて食事の一連の流れに参加している。今年度、管理者の交代があったが、職員は一致団結して利用者本位の優しいケアを目指した。また、入退居の激しい一年でもあり、ケアについては注意を払っていたが、不幸にして夜間の転倒骨折による退居が一件発生した。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~59で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
60	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	67	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
61	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,42)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	68	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
62	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:42)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
63	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:40,41)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
64	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:53)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	71	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
65	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	72	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
66	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	小規模施設が得意とする濃やかな個別ケアの実践に努めていて、「うちのばあちゃんだったら、どうする？」を合言葉に、管理者交代にもめげず、坂本管理者を中心に、全職員が心を一つにして努力した。	「自分のばあちゃんやったらどうする？」という理念を常にケアの中心に考えている。管理者は職員に対して、申し送り時やミーティングの時に理念について説明している。また、ケアにつまずいたり、迷ったりしたときには理念に立ち戻り検討している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町会ゴミ当番・地域の清掃・神社参り等に参加しながら、道で出会う近所の方や通学中の小中学生への挨拶等、日頃からの繋がりを大切にしたいと願っていたが、コロナ騒ぎの為に、今ひとつ、地域に出掛けられなかった。	例年であれば、食材や日用品の買い出しに近くのお店やスーパーに利用者と一緒に出かけたり、月に一、二度は喫茶店でカラオケを楽しんだりしているが今年はコロナのために行えていない。そんな中でも、グループホーム便りができたときには町会等に配布したり、川沿いを散歩したり、気多大社や羽咋市内ヘドライブに出かけている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	散歩や外出時に出会った地域の方々と、挨拶や会話を繰り返したり、近所の八百屋さんで散歩を兼ねて入居者さんと出掛けたりしているが、積極的な地域貢献と言える程のものではない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	毎回議題を決めて真摯に取り組んだが、議事録に代えた物が3回あり、3月開催分を除いて2回しか開催出来なかった。火災避難訓練の運推では、家族から高い評価を頂いた。	県からの通達もあり、今年是对面で2回、書面で3開催している。対面時には防火訓練について、書面では介護職員に求められる医療知識や経営の状況について報告が行われている。今年度6回目は今月末に開催する予定である。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	GH便りを羽咋市担当課に持参して、当GHの近況をお知らせしている。	グループホームだよりが出来た時には羽咋市まで持って行ってその時にグループホームの話をしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	定期的に全職員に身体的拘束防止マニュアルを回覧し、幹部職員は3ヶ月に1回、身体的拘束等適正化委員会で拘束の是非を話し合い、身体的拘束をしなくてよいケアへの努力を重ねている。	身体拘束防止マニュアルが整備されていて、ミーティング時等を利用して研修を行っている。また、身体拘束廃止適正化のための委員会は3か月に一度開催して身体拘束をしないケアに努めている。転倒防止の目的でセンサーを使用している方が2名いるが、家族に状況を説明し同意ももらっている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	全職員は、虐待がいけないことを正しく理解していて、以前は強い口調で話し掛ける職員もいたが、今は全くない。コロナ感染予防で職員はマスクを着用していて、大きな声があたかも虐待のように聞こえないか？十分に注意している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	以前、「日常生活自立支援事業」を活用されている方がいたが、現在の利用者に該当者はいない。家族や本人が望めば、支援する体制が十分に整っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時、当GHの料金体系・運営方針・介護への取り組み等の十分な説明を行い、必要な時は、請求書に「お知らせ」を同封したり、GH便りに記載したり等の努力をしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	毎年の運推会議で、代表者自ら、経営状況・運営方針等を説明し、家族の要望を聞く機会を設けている。毎月職員は、利用者希望調査を行い、実践と改善に努め、シーツ交換時には、家族にコメントを求めている。	苦情の体制は整備されて、重要事項などで周知されているが、特に苦情は寄せられていない。家族の要望・意見は毎月のシーツ交換の時に直接家族と職員が話し合う中で聴取している。「便り」が出来た時には施設からの手紙を同封している。今年は面会制限についてのお詫び、利用者の受診について、新型コロナウイルス感染症対策等を家族に伝えている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	コロナ感染予防の観点から、NPO法人菜の花グループのGH管理者会議は開催出来なかった。全体職員会議、ミニスタッフ会議等の開催も少なかったが、現場からの要望を踏まえ、代表者は管理者交代に踏み切った。	管理者はシフト勤務に入っているため、申し送りやミーティングのほか、毎日職員と話し合う中で職員の提案や意見を聴取している。代表者は毎朝ミーティング時に電話連絡をとるほかに、毎月一度は事業所を訪問してスタッフ意見を聴いている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	給与水準は高く、代表者は残業しない仕事のやり方を強く指導し、定時帰宅を求めている、当GHは、ほぼ出来ている。又、代表者は本人の努力に対して正しく評価を行い、素早く賃上げを行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	GHの業務は多岐に亘り、1人の職員が、介護・栄養士・看護師・事務員・相談員・清掃員等を兼務する。このような多岐の業務をこなすことはストレスが大きい。前年度行った書類簡素化の効果は大きく、職員のストレス軽減につながった。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ感染予防の観点から、代表者は他GHの経営者等と電話での情報交換は良かったが、職員間の相互訪問等は出来なかった。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居当初は全職員1人2声運動を実施する等して、利用者が不安に思っていることや、困っていること等に耳を傾け、信頼関係作りに最大限努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族には入居後数日間に渡り、利用者の様子を電話で知らせたり、入居者特集号を郵送したりして不安感解消に努め、利用者・家族双方が、安心出来る関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	この問いはGHの理想の姿であるが、「他のサービス利用も含めた対応」まではしていない。ただGHよりも療養型が相応しいケースや、在宅のままの方が相応しいと判断した時は、そのようにアドバイスしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	当GHでは、漬け物・梅干し・らっきょう・水ブキ・梅酒等を漬けるが、若い職員は何も知らず、利用者に笑われながら指導を受けている。ギブ&テイクの良い関係である。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ感染予防の観点から、シーツ交換の是非を色々検討したが、毎月家族が来所され、シーツ交換と面会を行った。利用者の精神的安定の為に、極力面会制限を避けた。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ感染予防の観点から、家族の面会が手一杯であり、利用者の馴染みの友人を招き入れるような状況ではなかった。	コロナ下ではあるが、家族との面会は感染拡大が著しかった時を除いて制限はしていない。そのため他の施設と比べて、利用者・家族のストレスは軽減している。今までのように自由に外出することはできない中で、馴染みの場所へドライブに出かけたりしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者1人ひとりの生活歴や性格を把握し、得意なことを活かしながら、利用者同士が共に支え合い、関わりが持てるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	「退居者特集号」を作り家族に送付し、ケアマネが転出先の施設等へ安否確認の電話をしている。又、長年GHIに在籍され、その後、転出先の施設で死亡されたような場合は、お悔やみのお花等も送っている。		
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	在所のお地蔵様に定期的にお参りに出掛けたり、外出願望の強い利用者さんのドライブを積極的に行ったり、利用者の意向の把握は全力で取り組んでいるが、人手不足もあり、十分に機能したとは言い難い。	毎月モニタリングを行い、その時に利用者から希望を聴いてそれを次月の目標に反映して、実行できるように努めている。一人ひとりの理解のためには家族から家での暮らしぶりを聴いたり、本人からどんな生活をしていいたかを聴いたり介護計画書をしっかり読み込んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者の入居前の生活をケアプランに表記し、全職員が把握している。そして、無理に過去の生活歴を聞こうとせず、現在の姿をありのまま、受け止めようとしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員は、1人ひとりの一日のスケジュール、心身状態、有する力の把握に努めている。朝夕の申し送り時に、注意すべきことがあった時は、必ず伝達している。伝達は職員数が少ないこともあり、スムーズに行われている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者・家族の希望を伺い、職員で話し合っ、ケアプランを立案している。また毎月ケアの目標を定め、月末には職員間でモニタリングを行い、翌月に反映させている。	計画作成担当者がアセスメントし、ミーティング時にサービス担当者会議を開催し計画を周知している。毎月末にモニタリングをし、大きな変化がなくても12か月に一度は計画を更新している。記録は個別日報(ケース記録)と排泄・食事・水分の記録がある。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人日報を見直し、より健康管理がスムーズに出来るよう「健康管理表」を作成した。そして、表に基づき、日々の健康状態を詳しく確認している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族の事情に応じて医療機関の受診代行、シーツ交換時の洗濯代行、外食同伴等、必要に応じて柔軟なサービス提供に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	綺麗に掃除された河川敷の散歩を楽しみ、徒歩数分の食料品店に買い物に出掛けたりして、大川地区の地域資源を十分に活用し、暮らしを楽しんでいる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医は腰が低く何でも相談し易く、急ぎの往診にも対応くださる。本年度も家族に、主治医の往診に立ち会って頂き、診療内容や薬剤について、説明を受けて頂いた。	8人の利用者が協力医療機関を主治医としている。1人は宝達志水町の病院へ家族と通院している。協力医療機関は往診してくれて24時間オンコール体制をとってくれているので家族、職員の安心感は大い。内科以外を受診する時には協力医療機関の紹介状を持って家族と一緒に受診する。また、訪問看護ステーションとも連携しており、こちらでもオンコール体制をとってくれている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪看あわらは非常に優秀な看護ステーションである。職員が困った時はいつでも相談出来、又、訪看も直ちに駆けつける体制が出来ている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は介護記録を医療機関に送付している。又、家族と連絡を取り合い、利用者の状態を相談したり、医療機関の相談員や当GH主治医と連絡を取り、早期退院に努めるマニュアルはあるが、該当者がいなかった。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	今まで何例かの看取りの経験はあるが、本年度は該当者がいなかった。	今年度は看取りの事例はないが、過去の事例では、家族からここで看取ってほしいとの希望があり、家族、主治医、ホームと話し合い看取りの方向で合意し、訪問看護を利用しながら生活し続けて最後家族に見守られながら息を引き取っている。重度化してきた場合には、利用者の状態にもよるが、ケアマネージャーが家族と話し合い施設の移行等について調整している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	全職員は繰り返し、緊急マニュアルを基に訓練を行っていて、又、救急救命訓練を受講済だが、非常時、職員がマニュアルを基に、咄嗟の判断を加えて動けるか？ と言うと、難しい。介護職員の欠点は、総合的判断力の欠如である。		
35	(13)	○緊急時等の対応 けが、転倒、窒息、意識不明、行方不明等の緊急事態に対応する体制が整備されている	当GHには詳細なマニュアルがある。又、職員変動が少なかったため、職員にはマニュアルがしっかり頭に入っていると思うが、マニュアル通りではない臨機応変な対応は、不得手と思う。	救急対応、無断外出、異変の観察、誤飲・窒息・喉詰まり・異色・低血糖対応等、状況別のマニュアルを一式にした「緊急時マニュアルファイル」が整備されており、月に3回（10日・20日・30日）、職員間でマニュアルの読み合わせ・確認を行う機会が設けられており、緊急時対応の周知が図られている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36	(14)	○バックアップ機関の充実 協力医療機関や介護老人福祉施設等のバックアップ機関との間で、支援体制が確保されている	協力医療機関との連携は十分にあるが、連携施設の特養とは、日常の実質的な交流が全くない。これは非常時を想定したバックアップと考えられるが、非常時にこの制度が実行出来るのか？ 極めて疑問。	利用者のほとんどが協力医療機関である医院を主治医としており、月1回往診に来てもらっており、緊急時の対応も可能である。バックアップ施設は、市内の特別養護老人ホームであり、日頃からホーム便りの配布、入居希望者の紹介等連携を行っている。	
37	(15)	○夜間及び深夜における勤務体制 夜間及び深夜における勤務体制が、緊急時に対応したものとなっている	緊急時、男性職員の方が冷静に対応出来、利用者を運ぶ等の力仕事に得意だと考え、夜勤には男性職員を多く採用している。又、近隣に住む職員がすぐに駆けつけられるような連絡網も完備している。	1ユニットのホームで夜勤者は1名である。夜勤者が1名となる時間帯で救急車対応しなければならない場合に備え、利用者別に既往歴や薬剤情報、緊急連絡先等を記載した「救急情報シート」を使用している。ホーム近隣在住職員もあり、10分以内に駆けつけられる職員も複数名いる。	
38	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	嚴重に火災訓練を年2回実施した。通報装置付火災報知器が導入されて、消防に通報しなくてよいマニュアルに改善したが、広い居間の火災では無理があることが判明し、元のマニュアルに戻している。崖地であることから、水害マニュアルについても徹底を図っている。	消防訓練を年2回実施しており、今年度は2回とも夜間を想定した訓練を行っている。火災の他、ホームが川の近くにあるため水害リスクに備えて、水害・津波マニュアルも策定している。防災状況について、運営推進会議で地域住民と情報交換を行っている。	
39	(17)	○災害対策 災害時の利用者の安全確保のための体制が整備されている	非常時にはボタン1つで、代表者・管理者・法人内関連GHに携帯電話がつながるようにセットされているなどの、濃やかな体制が整備されている。	消防設備点検は年2回行っている。火災時には携帯電話の短縮ダイヤルで、代表者、管理者、他のグループホーム等に連絡を取ることになっている。食料等の備蓄品はリスト化されており、リストに基づき保管されている。	
40	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員チェックリスト(入居者対応・言葉遣い)で、職員自身が自分の心に問いかけ、利用者の人格やプライバシー尊重に十分な配慮をしている。	年2回、「自己チェックリスト」に基づき、職員一人ひとりが利用者の尊厳やプライバシーについて振り返る機会を設けている。 日常的な実践として、年長者としての尊重や居室へ入室する際の本人への確認の徹底、ミーティング等は利用者の聞こえない場所で行う等の取り組みを行っている。	
41		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	献立やお茶の種類のリクエストを求めたり、レクリエーションの選択をご本人に委ねたり、家事も利用者の得意なことをお願いしたり、外出先もご本人の希望を最大限取り入れたりの配慮をしている。		
42		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者個人の生活のペースの尊重に努めているが、夜間入浴や自由な外出等、今の厚労省の人員配置基準と介護保険報酬では、これ以上の支援は難しい一面もある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴後は香りの異なる乳液・化粧水を選んでもらったり、ご自分の馴染みの物を持って来て頂いたりして楽しんでいる。髪はカラーを巻いたり、くるくるドライヤーを使用したり、マニキュアや化粧も楽しんでいる。		
44	(19)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立決定から買物、調理、後片付けを利用者と職員と一緒にいき、手作りの調理を心掛けている。旬の食材をいち早く取り入れ、多用している。	週3~4回の買い物の都合に合わせて、利用者からの希望を聞きながら、職員が献立を立てている。買い出しは現在職員が行っているが、外出自粛要請前は利用者も一緒にスーパーに出かけていた。野菜の皮むき、ゴマすり、食後の茶碗洗い等、その日その時の利用者の調子や状態に合わせて食事の一連の流れに参加している。	
45		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	以前は若手職員が多く、自分達の感覚で高カロリー食を提供していたが、現在はヘルシーメニューに変更した。古参職員は羽咋の田舎料理を献立に取り入れている。降圧剤服用者が多いので、減塩している。		
46		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	年に1回の歯科検診の実施した。コロナ感染予防の為に、毎食後のうがいの徹底・昼食後の舌ブラシ使用・就寝前の入れ歯洗浄の徹底を図った。1人1人の歯磨きチェックや義歯の状態等を全職員が把握している。		
47	(20)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者と職員が少人数であるGHの利点を生かし、職員は利用者の排泄パターンをほぼ把握している。よって、利用者の排泄の失敗事例は非常に少ない。	排泄チェック表を使い利用者の排泄パターンを把握しており、失敗しないようタイミング良く声掛けを行っている。リハビリパンツを使用している利用者でも、可能な限り夏場の温かい時期には通常の布パンツに切り替える試みを行い、排泄の自立に向けた支援を行っている。	
48		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	献立に食物繊維を多く取り入れ、歩行運動を継続し、腹部のマッサージを行い、起床時に冷たい牛乳を飲んだりしている。又、おやつにヨーグルト・ヤクルト・バナナ・焼き芋を食べることも多い。努力してもダメな時は、訪看や主治医に相談している。		
49	(21)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴日や時間帯に縛りはあるが、職員の負担と業務の優先順位等を総合的に判断し、入浴回数が多ければ良いという考えを捨てた。又、色々な香りの入浴剤や、菖蒲湯・柚子湯等を楽しんでいる。	入浴は週2回行っており、入浴の声掛けをしても拒否が見られる方へは時間をおいて再度声掛けをしたり対応する職員を変えたりして入浴ができるよう支援を行っている。入浴剤や季節の柚子湯や菖蒲湯で入浴が楽しめる支援を行っている。コロナ禍以前は千里浜の足湯まで外出を兼ねて行っていた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間、不眠がちの利用者には日中に身体を動かし、趣味の時間を楽しめるよう支援し、夜勤職員はよもやま話からスタートし、心の内を静かに伺うなどの傾聴に努め、睡眠導入剤内服を極力避けて安眠に繋げている。		
51		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	毎月、薬剤チェックリストで、現場・代表者共、不要な薬剤のチェックを行っている。又、請求書発送時、家族に薬剤情報を送付している。		
52		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	コロナの為に人込みを避けて、河原沿いの散歩を繰り返した。楽しみごと(絵手紙・読書・パズル・大人の塗絵・お経・踊り・ラジオ体操)、家庭菜園、朗読教室、音楽療法、法話等、一人ひとりに合った活動参加を促している。		
53	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	本年度は職員の人員配置がギリギリで、利用者の希望に沿った外出やドライブは、思う様に出来なかった。次年度は利用者の希望に沿った支援を行いたい。	天気の良い日には近隣を散歩している。ドライブも行っているが、感染対策のため外へは降りずに窓から景色を楽しむ形を取っている。自宅のことが気になる利用者に対しては、個別に自宅近くまでドライブし、安心に繋がっている。外出自粛要請以前は道の駅や神社参拝、図書館等さまざまな場所へ外出している。	
54		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者4人 銭管理をされていて、お金は買い物や神社仏閣への参拝時のお賽銭等に使われている。金銭出納帳は1か月に1度、担当者・管理者が点検し、家族から確認印を頂いている。		
55		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	遠方の家族には電話したり、絵手紙を作ったり、市販の絵葉書に一言コメントを書いて投函したりしている。30年年賀状は、字が書ける人には書いて頂き、書けない人には職員が代筆した。		
56	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室窓は採光の為に大きく取り、畳や障子を使用し、居間からは季節ごとの草花が咲く庭が見渡せる。トイレは混乱を防ぐ為に「便所」と表示し、蛍光灯も太陽光の暖かい物を使用している。足腰の弱い利用者の日光浴用に、ウッドデッキがある。	共用スペースでは日中、利用者が集まって塗り絵やパズル、DVD鑑賞等を行い、くつろげる環境にある。仲の良い利用者同士がお互いの居室で会話する場面も見られる。ウッドデッキからは桜や季節の花を楽しむことができる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
57		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間(居間・廊下・玄関先)では、所々にソファやベンチを配置し、気の合った利用者同士で思い思いに過ごして頂けるよう工夫している。又、ウッドデッキを作り、日向ぼっこに役立っている。		
58	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	写真や思い出の品・馴染みの品を、家族に持参して頂いているが、これ以上の協力は難しいので、最近は絵手紙等を飾り、花の季節に本人の写真を撮り、額装して飾っている。	居室の風景は利用者一人ひとりにとって居心地の良い、過ごしやすい居室環境作りに心がけている。職員が居室へ入室する際は声掛けを徹底し、プライバシーを確保している。備え付けのものはタンス・コンテナ・飾り棚があり、本人の生活歴に合わせて、雑誌や写真、座布団など本人の使い慣れた、馴染みのものの持ち込みを依頼している。	
59		○身体機能を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物全体が純和風となっており、畳を使用することで気持ちが和らぐ。トイレは「便所」と分かり易く表示している。全館バリアフリーで、また足腰の悪い人に配慮してソファを廃棄し、硬いクッションのベンチに取り換えた。		